

# 『国民党週刊』・『中国国民党周刊』

## 紹介

江崎隆哉

近年、中国国民党史研究が重視されるようになってきたが、中国において、中国国民党（以下「国民党」と略記）の機関紙である『上海民国日報』、『漢口民国日報』、『広州民国日報』が影印復刻された事が、研究を一層容易にしている事は周知の通りである。そしてここに紹介する『国民党週刊』・『中国国民党周刊』も、第一次国共合作期の国民党を研究する為の一次資料として、今後の研究発展に寄与できるものと考えられる。

以下に取り上げるのは、東洋文庫に原本が所蔵されている『国民党週刊』及び『中国国民党周刊』であるが、それ等が発行されてから既に70年近くの歳月が経過しているので、紙自体が既に「風化」していて折ったり糸を通して製本したりする事ができなくなっており、代りにその写真版が一般の閲覧に供されている。原本は第1期から第8期までの『国民党週刊』を除けば、横田実氏所蔵の『中国国民党周刊』を、1956年頃に古書店を通じて東洋文庫が購入したものである（横田実氏については本誌所載の本庄比佐子氏による「戦前の中国通記者・横田実について」を参照されたい）。

『国民党週刊』については、第1～8期は、横田コレクションとは別に、東洋文庫が古書店より購入し、一時期アメリカの研究機関に提供していたようであるが、詳しい点は不明である。今回筆者は、第3～42期の原本を見せて頂く機会を得たが、第8期までは1頁がB3版で現在の日本の一般的な新聞と同様の大きさであり、第9期以後の『中国国民党周刊』は、タブロイド版となり1頁がB4版となっている。なお、写真版の方

ではそれ以外にも、1924年1月に発行された『中国国民党全国代表大会特号』の第1～3特号と、1926年10月発行の第2巻第2～3期及び同年11月12日付の『総理生辰紀念特刊』が見られるが、これ等の入手経路も明らかではないようである。

では、次に内容紹介に移ろう。

執筆者及び記事の題名については、「記事目録」を見て頂ければ分かるので、ここでは「記事目録」に出ていない内容を中心に紹介したい。人事・編集体制・論調及び紙面の体裁から見て、(1)第1期(1923年11月25日)～第8期(1924年1月13日)、(2)第9期(1924年2月24日)～第42期(同年10月26日)、(3)1926年以後、の3つの時期に分けられる。以下にそれぞれの時期について略述する<sup>1)</sup>。

#### (1) 第1期(1923.11.25)から第8期(1924.1.13)までの時期の『国民党週刊』

この時期は、第1期が「国民党臨時執行委員会」の、第2期以後が「国民党臨時中央執行委員会」の名義で発行されている。第1期の冒頭部の記述に拠るなら、『国民党週刊』は、国民党の各地の支分部の下で全党員が購読し且つ販売を行うものであり、内容的には、臨時執行委員会の言論機関で、党の改組計画に関する全党員の意見を募るものであった。経理処と編輯処は、同じ広州市内ではあったが、前者が南堤四十四号、後者が広南路門牌三十五号と異なる場所に置かれ、経理主任を林黄卷が、編輯主任を謝英伯が担当していた。第3期(1923年12月9日)になると、編輯処は市内の東堤二馬路榮利新街門牌三号に遷され、主任も徐蘇中に交代している。又、第7期には、経理主任の林黄卷が国民党広州市第五区区党部執行委員と党全国代表大会福建代表に選出されて多忙であることから、職責を温善庵に譲る旨が声明されている。

当時の政治状況から考察しても明らかな事だが、この時期には1924年1月に開催される国民党第一回全国代表大会(以下「一全大会」と略記)に向けて各支部の代表を選出していると共に、各地の党組織が急速に整備されており、『国民党週刊』の記事にもそれが反映されている。「党綱」や「章程」の草案及び改組へ向けての種々の会議記録が多く掲載され、国民党への革命力量の集中が呼びかけられている。しかし、孫文を前面

に押し出す作為はあまり感じられず、寧ろその講演記録などは少ないとすら言え、国民党全体で国共合作に向かってゆくというニュアンスが伝わってくる。第7期の記事に拠れば、当時の臨時中央執行委員会は、劉成禺・謝良牧・吳鉄城・陳樹人・鄧沢如・孫科・馮自由・林森・謝英伯・徐蘇中・譚平山といった人々から成り、「国民党週刊同人」としては、朱晦生・林沛亭・孫鏡亞・徐蘇中・林黄卷・劉民畏・張振民の名が挙げられている。

第8期に入ると、第7期で声明されているように、温善庵が経理処主任の地位に就き、経理処と編輯処が広州市内の越秀南路の惠州會館に遷されている。2箇所に分散していた経理・編輯両処が1箇所に集められ効率化が図られた(編輯処主任は不明だが、徐蘇中がそのまま留任した可能性が強い)わけだが、1月中は、一全大会の成果の宣伝に重点が置かれ、3回にわたって『特号』が発行されている。『国民党全国代表大会特号』第1号(1924年1月20日)の記事に拠れば、正式に組織された中央執行委員会(以下「中執委」と略記)の委員には、先の臨時中執委のメンバー全員に加えて、胡漢民・廖仲愷・許崇智が選出されている。

#### (2) 第9期(1924.2.24)から第42期(1924.10.26)までの『中国国民党周刊』

1ヶ月半近い間を置き、『中国国民党周刊』とタイトルを改めて発行された第9期からは、上記の中執委の名が冠されており、第42期に至るまで特に人事異動は無かったようである。記事の配置も定まり、冒頭部に「社論」が、次に「本党消息」として中央及び各地方党部の活動や議決事項の紹介が、そして最後に党内党外人士・機関の言論が掲載されている。更に、第30期(1924年7月20日)からは、末尾に「先烈伝記」として革命烈士を紹介している。

第8期までと比して内容面での目立った変化を挙げるなら、孫文の講演録が記事中に占める比率が飛躍的に増加しているという事が言えそうである。特に、第11期(1924年3月9日)の「民族主義第一講」に始まる孫文の「三民主義」講演録は、知る限りでは当時『廣州民国日報』と並んで最も早い時期における「活字化」であり、貴重な第一次資料であると言える。この一連の講演は、第30期の「民権主義第六講」まで断続

的に掲載されているが、「民生主義」に関する講演は見られない。又、「総理……訓詞」或いは「大元帥……演説詞」といった形で、孫文の各方面での講演も多数収録されているが、1924年4月に発表されたと言われる「国民政府建国大綱」が掲載されていないのは、意外と言えるかも知れない。

又、「本党消息」では、「(-)中央消息」として中執委の詳細な会議記録が一貫して載せられ<sup>2)</sup>、各会議の出席者も知ることができるが、それに拠るなら、当初選出されたメンバーのうち劉成禺・謝良牧・吳鉄城・陳樹人・孫科・馮自由・謝英伯・徐蘇中は会議に出席せず、それに代って鄒魯・彭素民・林祖涵・柏文蔚・覃振・張秋白・季宗黄といった人々が常連となっているのが分かる。それに加うるに、第20次会议(1924年4月10日)からは戴季陶が、第36次会议(1924年6月12日)からは汪精衛が参加しており、孫文は第25次会议(1924年4月28日)までの間はおよそ2回に1回の割合で出席しているが、第26次会议(1924年5月5日)からは広州を離れ北上したためであろうが、全く参加した形跡は無く、以後の中執委が孫文を欠いたまま運営されていたことが見て取れる。

以上見てきたように、第9～42期の『中国国民党週刊』は中央での会議記録と中執委員の言論を中心に構成されており、孫文の生前ということもあってか、広東軍政府内部における意見対立等をそこから読み取ることにはできない。又、労農運動に関する情報も多くない事もあって、広東全体の状況と言うよりは、寧ろ孫文を含めた権力の中枢に在った人々の政策決定過程などを分析するのに、『中国国民党週刊』は最も有用であると言えよう。但し、対立関係を知るのは困難でも、記事が占めるスペース等から広東軍政府内部における勢力関係を推測することはできる。当時は、蔣介石は中執委の中に如何なる地位も有しておらず、その一方で廖仲愷・汪精衛といった「左派」が主導的な地位を占めていた事が窺い知れる。特にこの時期の後半では、第29期(1924年7月13日)に汪精衛の声明が掲載され、広州各所での自らの講演が種々の新聞に載せられているが、自分で目を通したものではないので責任は負いかねるものとされ、第32期(1924年8月3日)の冒頭「社論」に掲載された「汪委員精衛兩次重要的演講」の末尾には、汪精衛自らが目を通したものであるとの断り書きがつけられている事からも、その権力の程が分かる。

なお、写真版は第9～42期総てが揃っているわけではなく、第26期(1924年6月22日)、第31期(7月27日)、第33期(8月10日)、第35期(8月24日)第41期(発行日不明)が欠落している。第39期(9月21日)以後は原本そのものの欠損している部分が多く見られる。又、第40期が発行された9月28日までは、定期的に一週おきに発行されていたが、それ以後は版下工・植字工のストライキにより発行が遅れた旨が、第42期(10月26日)の冒頭に記されている。1924年発行分は、この第42期を以て終わりとなるのだが、そこに掲載された中央宣伝部(部長は汪精衛)の声明等に拠れば、『中国国民党週刊』は以後『広州民国日報』に吸収される旨が中執委によって議決されている<sup>3)</sup>。一つの組織・団体が二種類の機関紙誌を持つ例は、1925年に組織された中国青年軍人連合会が『中国軍人』と『中国青年軍人連合会週刊』を発行していた(前者は中国で影印複製されている)事を見ても、特に珍しくはなかったと思われる。だが、宣伝の一層の統一が目指され、しかも中執委委員の多くが孫文に随行して韶関に赴いてしまい、中執委第56次会议が開けず、その会議記録を載せるという主目的の一つを失ったため、『中国国民党週刊』は廃刊されざるを得なくなったと解釈される。そして当然の事ではあるが、その結果、温善菴は經理処主任の職を退いている。

### (3) 1926年発行の『中国国民党週刊』

この時期に関して写真版に収録されている部分は少なく、第2巻第2期(1926年10月24日)、第2巻第3期(10月31日)及び11月12日に発行された『総理生辰紀念特刊』が見られるのみである。資料の不足も手伝ってか、当時の編輯・經理体制を知る術は無いが、「通訊処」として上海環龍路四十四号週刊編輯委員会の名が記されている事と、執筆者及び掲載論文の内容を考え併せるなら、この時期の『中国国民党週刊』は、当時上海に在った西山会議派系の中執委の下で発行されている事が容易に推察できる。

第2巻の執筆者は、ペン・ネームらしきものが多用されているので定かではないが、11月発行の『特刊』の執筆者には、張継・謝持・屈正・鄒魯といった西山派の名が見られる。又内容的には、1924年発行分が、国民党の共産化を否定しながらも、三民主義が社会主義を包含し得ると

した孫文の枠組に基づいていたのに対し、1926年の分は、民生主義とマルクス主義の相違を強調し、広州の国民党員に「清党」を呼びかけるなど、「分共」志向を明確に打ち出しているのが特徴である。書式も、1924年版のような新聞形式ではなく、『嚮導週報』とほぼ同様な雑誌形式へと変化しており、'24年版とは名が同じでも全く内容は別のものと解釈しても差し支えあるまい。

このような方針のもとで、いつまで発行されていたかは現時点では不明だが、東京都立大学の松本文庫に、第3巻第7・8・9・10期合刊(1927年4月27日)が所蔵されている事から、四・一二クーデター以後まで発行され続けていたものと考えられる。

#### 注

- 1) 1924年の第42期までについては、呂芳上『革命之再起——中国国民党改組前対新思潮的回應(1914~1924)』(中央研究院近代史研究所專刊57, 1989年)の46~47頁にも、簡単に紹介されている。
- 2) 中執委の第1~20次会議(第4次までは「中央党部会議」という名)の会議記録は、楊天石氏が『近代史資料』総76号(中国社会科学出版社, 1989年)に載せられているが、やはり東洋文庫で閲覧したと前書きにある。
- 3) 『広州民国日報』影印版についての文献解題は、『東方』第107号(1990年)に掲載されている高綱博文氏の解説を参照されたい。